

一八八二年十二月十四日(木)

ヴィジヤイ・クリシユナ・ゴースワミー氏とその他のブラフマ协会会员たちに  
対する聖ラーマクリシユナの教訓

解脱した魂が肉体をすてるのも自殺か？

魂にとつては誕生もなく死もなく

元初より存在して永遠に在りつづけ

肉体は殺され朽ち滅びるとも

かれは常住にして不壊不滅である

—— ギター 2 — 20 ——

ドフキネシヨル  
南神村のカーリー殿に、ヴィジヤイ・クリシユナ・ゴースワミー氏がバガヴァンシユリー至尊聖ラーマクリシユナにお  
会いするため参上していた。三、四人のブラフマ協会員がいつしよである。オグロハヨン月白分四日目。  
イギリス流ではキリスト暦一八八二年十二月十四日。パラマハンサ・デーヴァ大覚者様の代表的な信者であるバララーム氏

と共に、彼のボートに乗ってカルカッタから来たのである。聖ラーマクリシュナは正午から今し方で、少しお休みになっていたところだった。日曜日にはたいそう大ぜいの人びとがここに集まってくるので、タクールと差し向かいでお話をしたいと思う者は、日曜以外の日に来るのである。

大覚者様は寝台の上に腰掛けておられる。ヴィジャイ、バララーム、校長、その他の信者たちは西向きになって——タクールに向きあつて、それぞれマットの上に坐ったり、或いはじかに床の上に坐っている。部屋の西側の入口からは、聖なるガンガールの流れがよく見えていた。冬の日の静かに透き通った流れであつた。入口を出た処に半円形の西ペランタがあり、その向こうは花壇、その先が堤防になっている。堤防の西に聖なる水、いかなる罪汚れをも清浄ならしめるガンガーが、あたかも大神のいます寺院の足許を洗うかのように、歓びの音をたてて流れている。

寒い季節なので、どの人も暖かそうな服装をしている。ヴィジャイは痲痛せんつう(発作性の腹痛)にひどく苦しんでいるので、小壘びんに薬を入れて持つてきている。薬の時間がきたら服用するのだろう。ヴィジャイは現在、サーダーラン・ブラフマ協会の有給説教師であつて、本来、協会の説教壇に上がつて説教をするべき筈の人物なのだが、協会のやり方にいろいろと賛成出来ぬことがあるので、今でもその役目を果しているのかどうか——自分で思う通りの話をしたり、行動をとったりすることは出来ないのだから。ヴィジャイはたいそう高貴な家柄の出で——アドヴァイタ・ゴースワミーを先祖に持つ家に生まれた。アドヴァイタ・ゴースワミーは智慧の行者で、無相の至上梵パラブラフマンおもを集中していたのであつたが、その上にまた、信仰の頂点にも登りつめた人物であつた！ 彼は至尊バガヴァンチャイタニヤデーヴァ様の主

な従者の一人で、ハリ(神)の愛に酔っては踊っていたものだった。踊りながらだんだん身につけている衣服を脱ぎ捨てていくほど、無我夢中になるのが常だった。ヴィジャイ自身も、ブラフマ協会に入つて無相の至上梵を冥想してはいたが、偉大な信仰者だった先祖、聖アドヴァイタの血が血管の中を流れているのだから、身体のなかに蔦つたかれてあつたハリの愛の種子が芽を吹き出してくるのは、ただ時間の問題だったのである。そんなわけで、彼は至尊スワミ聖ラーマクリシュナの世にも稀な、神の愛に酔いしれた有様を見ると、完全に魅入られてしまふのだった。呪文をかけられたヘビが鎌首をもたげたまま、蛇使いのそばにジツと坐っているように、ヴィジャイも大覚者様のお口から出てくる神聖至高のお言葉を聞きながら、魂を奪われたようになって、その御方の近くに坐りつづけているのだった。そして、その御方が神の愛を飲んで、幼児おたまごのように踊り出される時には、ヴィジャイもいっしょになつて踊るのである。

アーリアダハに住んでいたヴィシユヌという少年が、カミソリで喉を切つて自殺した。今日は先ずはじめに、彼のこと話題になつた。聖ラーマクリシュナは、ヴィジャイ、校長はじめ信者たちに向かつてこうおっしゃつた。

「なあ、この少年こどもが肉体からだを捨てたと聞いて、胸が潰つぶれる思ひだよ。此処ここにもよく来たし、学校にも通つていたが、でも、よくこう言つていたよ——『どうも、この世の生活は好きになれない』つて。西部の方にいる親類のところへしばらく行つていたが、そこではいつも、野原や森や丘の上に独りで行つては、坐つて冥想していたそうだ。いろいろな姿の神さまが見える、と言つていた。

きつと、最後の生まれ変わりだったのだろう。前生で仕事をたくさんしてきたのだ。ほんの少しやり残したことがあって、それが今度で仕上がったのだよ。

前生から受け継いでいる力(サムスカーラを認めなけりゃいかん。聞いた話だが、長いことシャヴァ・サードナ(死骸を觀照して瞑想する密教的行法)をしていた人が、森の奥深くで宇宙の母なる神を礼拝していた。けれども、彼はおそろしい妖怪のまぼろしを見つづけるだけだった。最後には、虎に襲われて殺されてしまった。ほかの一人は、虎から逃げるために近くにあった樹に登っていたが、残された死骸やその他の祈禱の道具が揃えてあるのを見て、樹から降りてきてお祓いをしてからそこに坐った。すこしの間、称名を続けていると、大実母が現れてこうおっしゃった——「わたしは、おまえのことをたいそう喜んでいる。さあ、恵みを授けてあげよう」大実母の蓮華の御足を拝してから、その人は言った——「大実母、ひとつおたずねいたします。あなたのなされ方には、もうびつくりするばかり！この人はこんなに熱心に、こんなにいろいろ用意をして、こんなに長い間あなたを拝んでいたのに、あなたはこの人に、慈悲のかけらさえ与えなかつた！それなのに、何も知らず、何も聞かず、礼拝も修行もロクにせず、宗教の知識も、信仰も、殆ど持っていないこの私に、お恵みを下さるのですか!」

大実母は笑いながらおっしゃった。「息子よ！おまえは前生のことを覚えていない。おまえは生まれ変わる度に、たくさん生涯でわたしを知ろうとして修行を重ねた。その果報でこういう成行きになって、このわたしに会うことができたのだよ。さあ、こんどはどんな恩寵を授けてあげようかね?」

一人の信者が、「自殺するなどという話を聞くと恐ろしくなります」と言った。

聖ラーマクリシュナ「自殺することは大罪だ。何度も、何度も、この世に戻ってきて、同じ苦しみを経験しなければならぬ。」

だが、見神した後なら、肉体を捨てても自殺ということにはならない。そういう人は肉体を捨ててもとがめられない。神の智識を獲た後で、人によつては肉体を捨てる場合があるんだよ。粘土の鑄型の中で黄金の像が出来上がったら、鑄型は残しておいてもいいし、壊してしまつてもいいんだよ。

何年も前のことだが、バラナゴルから一人の青年がここへ通つてきていた。年は二十位はたちだったかな。ゴパール・センという名だった。私のところへ来ると、よく強い恍惚状態になつて、フリダイが体を支えてやったものだ。そうしないと手や足にケガをするからね！ その青年がある日、突然、わたしの足に手をおいてこう言った——『もう私は、こちらに来ることができません。さよならと言わねばなりません』と。何日か経つて、彼が肉体を捨てたことを知らされた』

### 魂の四段階——縛られた魂(人間)の徴しるとしての女と金

はかなく悲苦に満ちた物質界このよにあつては

ただわたしを信じ頼つて過すことだ

聖ラーマクリシュナ「人間には四段階があるとされている——縛られた段階、解脱を求める段階、解脱した段階、永遠不変に完成した者。世間は神様の幻影で魚を捕まえる網のようなもの——。人間は魚で、神様は漁師だ。漁師の網に魚がかかった場合、何匹かは網を食い破って逃げようとする、つまり解脱しようと努力する。こういうのは解脱を求める段階と言っている。逃げようと努力しても、皆が皆、逃げられるわけではない。せいぜい、二、三匹がドパーンと水音をたてて逃げる。すると人びとは言う。『ああ、デカイやつが逃げたぞ！』この二、三人が解脱した人だ。また何匹かの魚は生まれてつき用心深く、決して網にかからない。ナーラタたちのような永遠不変の魂は、決して世間という網にはかからない。だが殆どの魚は網にかかってしまう。けれども、網にかかってもうじき死ぬ運命だということにも気がつかない。ただもう力の限り走りまわって、網の目につかつたり、別なのは泥の中にもぐって体を隠そうと一生懸命だ。網から逃げようと努力するどころか、だんだん泥の中に身を沈めていく。これが縛られた段階の魂だ。網にかかっていて、しかも、此処は住心地のいい処だと思っている。縛られた魂たちは世間、つまり女と金に執着しているのだ。死の海深く沈んでいるというのに、うまくいっていると思っているんだ！解脱を求める人びとや解脱した人たちは、世間を危ない井戸のように感じていて、近づこうとしない。それで、人によっては真理の智慧を獲た後や、至聖をつかんだ後に、肉体を捨ててしまうこともある。しかし、こういう種類の捨身は滅多にないことだよ。

縛られた人——つまり世俗的な人は、何としても目が覚めない。どんなに悲しい目に遭っても、ど

んなに酷い目に遭つても、どんな災難にぶつかつても、それでも靈性が目覚めないのだ。

ラクダはトゲだらけの草が大好きだ。食べると口から血がダラダラ流れ落ちるのに、それでもそのトゲ草を食べるのをやめられない。世俗的な人はどんなに苦難、艱難かんなんに遭つても、しばらく経つと忘れて、また元通りの暮らし方をする。女房が死んだり不貞をはたらいたりしても、懲りもせず、又、別の女房をもらう。子供を亡くして悲嘆に暮れても、しばらくすると忘れてしまう。嘆き悲しんでいた母親は、何日かすると髪をきれいに編んで寶石を身に飾る！　こういう種類の人間は、娘どもの結婚で破産するほどになつても、毎年、毎年、子供をつくる。訴訟の費用ですつからかんになつても、また懲りずに裁判沙汰だ！　生まれた子さえ満足に養えず、教育もできず、ロクな家にも住まわせてやれないのに、それでも、毎年、毎年、子供をつくる！

それから、蛇がモグラを呑み込もうとしているのにもよく似ているよ。うまく呑み込むことも出来ず、そうかといつて吐き出すことも出来ないでいるんだ。もしかすると、あの縛られた人たちだつて、世間のことは、何の頼りにもならない、芯と皮だけで実のないアムラのようなものだということに、気がついているのかも知れない。けれども捨てられないんだ。それでも神様に心を向けることが出来ないんだよ。(訳註、アムラ——スモモのような果実で熟した実は食べられるが一般的ではない。実の大きさに比べて食べる部分が少ないので、見かけだけで実のない物、あまり役に立たない物の代名詞のようになっている)

ケーシャブ・センの親戚で五十位の人に会つたことがあるが、トランプばかりしているんだよ。まるで、神の御名を称えるにはまだ時期が早い、とでも言うような顔をしてさ！

縛られた人には、もひとつ徴しるしがある。その人を俗世から離して清浄な場所に移してやると、へとへトにくたびれて死にそうになる。糞虫は糞の中が一番居心地がいいのだ。それでこそ肥ふかってピンピンしていられる。そんな虫を米びつの中に入れてと死んでしまうのさ」

一同、声もない。

### 強い離欲と縛られた魂

ヴァイラトキヤ

クンティの息子 剛力無双の勇士よ

たえず動きさわぐ心を制御するのは

君の言う通りたしかに難しいが

不断の修練と離欲によつて可能だ

—— ギター 6 — 35 ——

ヴィジャイ「縛られた個ひと我は、どんな心掛けでいれば解脱することができますか？」

聖ラーマクリシュナ「神様のお恵みで強い離欲の精神を持つことができれば、この世の女と金への執着から解放されるよ。強い離欲とはどういうものか、教えようかね？ まあ、そのうち何とかなるだろう、今のところは称名だけしていよう、なんて言っているのは弱い離欲だ。強烈な離欲の精神を持つた人は、生命いのちかけて神に夢になる。母親がお腹の中の胎児こどもに生命いのちがけになるように——。強い



離欲の人は、神のほかは何一つ欲しがらない。世間を危うい井戸のように思っていて、そこで溺れかけているように感じているのだ。親類たちを汚<sup>けが</sup>らわしいへビのように思つて、かれらのところから逃げ出したいのだ。そして、ほんとうに行つてしまふんだ。家のことを心配ないように調<sup>とと</sup>えて、それから神様のことを考えよう、なんていう気持ちには全くない。心の中で大きな決心をしているんだ。

強い離欲とはどんなものか、一つ警<sup>たご</sup>え話を聞いてごらん。ある地方に日照りがあつた。百姓たちは皆、溝を掘つては遠いところから水を引いてこなければならなかつた。一人の百姓は大決心をして、溝と河とがつながつて畑に水が流れこんでくるまで、溝を掘り続けようと心に誓つて働き始めた。沐浴の時間になつたので、女房が娘に油を持たせてよこした。娘は、「お父さん！ 時間ですよ、油をつけて沐浴して下さい」と言つた。かれは答えた。「お前は帰つていろ。おれは今、仕事があるんだ！」もう大分時間が経つたけれど、まだ百姓は畑で働いている。沐浴のことなんか考えもしない。こんどは女房が畑にやってくるまで、まだ百姓は畑で働いている。沐浴のことなんか考えもしない。こんどはあなたは、程度ということを知らないんだから！ 出来なかつたら明日にするか、御飯を食べてからになさいよ」百姓はすっかり怒つて、鋤<sup>す</sup>を持つたまま駆けよつてきて女房を怒鳴りつけた。「おまえには分別というものが無いのか？ 雨が降らないんだぞ。作物が枯れかかつてるんだぞ。こんなことで子供らに何を食わせていけばいいんだ？ 食えなけりや、皆が死んでしまふんだぞ！ おれは決心したんだ。畑に今日、どうしても水を流し込むんだ。行水やメシの話は、それから後にしろ！」女房はその劍幕に驚いて家に逃げ帰つた。百姓は一日中ひどい骨折りをして暗くなつたころ、やつと畑の

溝を河につないだ。そこで、かれは腰を下ろして坐りこみ、河の水が畑にサラサラと流れこむのをじつと眺めた。心は安らぎと欲びでいっぱいになった。そして、家へ帰って女房を呼ばって言った。『さ、油をとってくれ。それにタバコ用意だ』それから落ち着き払って体を拭き、飯を食べ、気持ち良さそうにグーグーいびきをかいて眠ってしまった！ この百姓の決心が強い離欲の譬<sup>たと</sup>えだよ。

それから、もう一人の別な百姓は——かれも畑に水を引こうとしていた。女房がやってきて言った。『もう大分時間が経ったから戻りましょう。そんなに際限<sup>キリ</sup>もなく働くことはないんですから』かれは大して口答えもせず、鋤を脇に置いて女房に言った。『お前がそう言うんなら、じゃあ戻ろうか！』（一同大笑）。その百姓は、遂に畑に水を引くことができなかつた！ これがいいかげんな弱い離欲の譬<sup>たと</sup>えだ。

大決心をしなければ百姓も畑に水が引けないように、人も神をつかむことはできない。

### 女と金の奴隷

無数の河川が流れ入っても

海は泰然として不動である

様々な欲望が次々に起こっても

追わず取りあわずにいる人は平安である

——ギーター 2—70——

聖ラーマクリシユナはヴィジヤイに向かつて——

「以前まねはよく来たのに、この頃あんまり来ないのはなぜだい？」

ヴィジヤイ「ここへ来たくてたまらないのですが、私は自由にできないのです。ブラフマ協会の仕事を引き受けているものですから——」

聖ラーマクリシユナ「女と金が人間を縛りつけるんだよ。人の自由を奪ってしまうんだ。女がいるから金が必要になる。そのために奴隷になる。自由も独立もなくなってしまうんだ。自分の望み通りの仕事に就くことはできないよ。」

ジヤイプールのゴーヴィンダジー寺院ブイジャリの聖職者たちは、初めのころ結婚してなかった。その時分は、かれらもたいそう誇りが高くて活いきいき々々していたよ。藩主ラシジが一度呼びにやつたが来なかつた。『王がこちらへ来るように』と言ってね。その後、王と大臣たちが相談して、かれらを結婚させた。そうしたらもう、かれら呼びにやる必要はなくなつた。自分の方から呼びもしないのにやってくるんだ。『大王を祝福するために参りました。神前に供えたこの聖なる花を、何とぞ受け取り下さい』などと言ってね。次々と金のあることができて来なければならぬ。今日は家を建てるためだとか、今日は子供の喰い初め式(アンナ・ブラーシャナ)のためだとか、やれ、今日は子供の入門の儀式(ウパナヤナ)のためだとか——。

千二百人のネダ(ヴィシユヌ派の剃髪した行者)と千三百人のネデイ(同じく女行者)が通力なを失くした話——この話を知っているかね。ニティヤーナンダ・ゴースワミーの息子のヴェルバドラには千三百人

のネダ（剃髪した弟子）がいた。かれらが神通力を獲たとき、ヴィルバドラは心配になった。この方はこ  
うお思いになったのだ——この人たちは神通力を獲て、人に向かって言ったことは何でもその通り  
になる。行く先々で恐れられることだろう。人が知らないで彼らの気分を損ねても、その人は不幸な  
目に遭うだろうから——こう考えて、ヴィルバドラは彼等と呼んでおっしゃった。『ガンジス河へ行っ  
て、勤行をすませてここへ来なさい』ネダたちはたいそう優れた霊力を持っていたので、瞑想するう  
ちに三昧に入り、満潮の河水が頭の上を流れても気付かない。やがて、潮が引いてもそのまま瞑想を  
つづけていた。ところで、かれらの中で百人のものは、ヴィルバドラがこのあと何を言うつもりか分  
かっていた。師の言いつけには叛むかきたくないので、その連中はそこから姿をくらましてヴィルバドラ  
の面前に出なかつた。残りの千二百人がヴィルバドラに会うと、師はこうおっしゃった。『ここに  
いる千三百人のネデイたち（女行者たち）がお前たちに仕えることになる。この者たちと結婚しなさい』  
彼等は答えた。『かしこまりました。ですが、百人のものはどこかへ行つてしまいました』というわけで、  
千二百人はそれぞれ忠実な女召使いと住むことになったのだよ。すると、もう彼等の霊的威厳はな  
く、養われた霊力もなくなつてしまった。女の人といっしよに暮らすことで自由が奪われて、それ  
で力がなくなつてしまったのだ。

ヴィジャイ、おまえ、自分でよくわかっているだろう。他人の仕事に使われていると、どんな結果  
になるか。それにまあ、見てごらん。学位をいくつも持つて、イギリスの学校を出た学者が大ぜい、  
イギリス人の主人に雇われて使われては、一日中、朝に晩に、長靴ブーツで蹴りを食らつてるじゃないか。

原因といえれば唯一つ——女なんだよ。結婚して家庭生活という市場を開いて、もう店じまいをする方法がないんだ。それでこんなにも辱めを受けたり、奴隷の苦しみを味わっているのだ」

〔神を掴んだ後で女を母性として敬う〕

聖ラーマクリシユナ「一度、さっき言ったような強い離欲を行なつて、神様をしつかり掴んだならば、もう女の人に対する執着はなくなる。たとえ在家の暮らしをしていても、女の人に執着したり、恐れたりする気持ちはなくなるのだ。大きな磁石と小さな磁石があつたら、鉄片はどっちに引かれる？ 大きい方に引きつけられるだろう。神様は大きな磁石で、それに較べりや女なんて、ほんの小さな磁石さ！ そうなれば女に何ができる？」

一信者「先生！ すると、女の人を嫌いになる方がいいのでしょうか？」

聖ラーマクリシユナ「神様をしつかりつかんだお方は、女をそのような目で見ないから、恐れたりする必要もない。こういうお方はね、女は至聖大実母の一部分だということがはつきりわかっているから、母親に対する気持ちで拜んでいなさるのだ。」

ヴィジヤイ、時々来てくれ、おまえにとっても会いたんだよ」

**神の命令を受けた人が正しい霊の教師である**

ヴィジヤイ「ブラフマ協会の仕事をしなくてはなりませんので、いつでもこちらにうかがうという

わけにはいかないのです。機会おきがあり次第、参りましょう」

聖ラーマクリシュナ「宗教の指導者という役目は、大変難しいものだ。神様から直接じかに指図していただいた人物でないと、人を正しく導くことは出来ないからね。

神様のお指図なしに教えても、人は言うことを聞かないよ。そんな教えには力がないからね。先ず勤行したり、ほかにどんな方法でもいいから、とにかく神様をはつきりつかむことだ。あの御方のお指図を受けてからレクチャーすることだ。郷里くわにハルダル池という名の池があつてね、その岸辺へりで毎日のように人が大小便をしに行くんだ。池の沐浴場ガートに通う人たちが怒つて、大声で怒鳴りつけていた。怒鳴つたつて何の役にも立たない。次の日には又、岸辺にしてある！ とうとう役場の記章バッチを付けた人が来て注意札を立てた——この場所にこれこの行為をするべからず。もし、かかる行為をする者は罰せらるべし。この注意札を立ててからは、もう誰一人、池の端を便所代わりにするものはいなくなつた。

あの御方のお指図を受けた後なら、どこへ行つても人の教師となれるし、レクチャーもできる。あの御方のご命令を受けた人は、あの御方のところから力が授けられるのだ。そのときはじめて、人を霊的に導くという難しい仕事ができる。

一人の大地主に対して、貧しい小作人が大きな訴訟を起こした。そのとき人びとは、小作人の後うしろには誰か有力者が付いているな、とさとしていた。そうでなかつたら、ほかの大地主がその小作人の背後うしろから訴訟ごとを進めているんだ！ 人間は弱い生き物だ。神様から直じかに後押ししてもらわなけ

りや、霊の教師なんていう難しい仕事はやっていけないよ」

ヴィジヤイ「先生！ プラフマ協会の指導方法では、人びとを救済できないのでしょうか？」

〔サツチダーナンダこそ師——解脱を与えて下さる〕

聖ラーマクリシュナ「人間がこの世の束縛から他人を解放してやることなど、出来っこない。この、魂を虜にする現象をお創りになったあの御方だけが、現象から解放することがおできになる。グルであるサツチダーナンダ（実在、智慧、歓喜）のほかには逃げ場所はない。神様を掴んだこともなく、お指図を受けたこともなく、神の力で強くなったものでもない連中が、生き物をこの世の鎖から解き放してやることなんか、どうしてできるものかね。

ある日、五聖樹の柱からジャウ樹台に向かつて歩いていたら、ウシガエルが一匹、死にそうな声でガアガア泣き叫んでいた。ヘビにつかまっただな、と思った。しばらくしてその帰り途、そのカエルが、まだ、けたたましく泣いている。どうしたことかといぶかつてよく見たら、水ヘビ（毒のない力の弱いヘビ）がカエルをつかまえていて——呑み込むこともできず、あきらめて放すこともできず——それでカエルの苦しみは終わらないのだ。何とまあ、これがコブラにつかまっただのなら、三度も叫べばカエルは黙ってしまうだろうに、ただの水ヘビにつかまっただために、カエルは苦しいし、ヘビも苦しいのだ。

もし、本物の教師につかまったら、人間の我執は三声で消える。教師が未熟だと教師も苦しいし、

弟子も苦しい！ 弟子の我執は止まないし、この世の足枷も断ち切れない。未熟な教師の手に落ちたらしいご、弟子は救われない」

マ－ヤーあるいは、我<sup>が</sup>の覆いがとれたら解脱、又は得神

我執の雲におおわれた魂は

自分自身が活動しているものと錯覚し

『私が為している』と思ひこむ

—— ギーター 3 — 27 ——

ヴィジャイ「先生！ どうして私どもはこんなふうに束縛されているのでしょうか？ どうして神を見ることができないのでしょうか」

聖ラーマクリシュナ「衆生<sup>ジウツ</sup>の我執が、マ－ヤー（現象、迷妄）なんだよ。我執があらゆるものを覆っているのだ。私<sup>が</sup>がなくなれば悩みも消え去る<sup>だ</sup>よ。神様のお恵みで、私は全く無力である<sup>という</sup>ことがほんとにわかれば、その人は生きながら解脱してしまふ。その人はもう、何の恐れも心配もないのだ。

このマ－ヤーとか、我<sup>が</sup>とかいうのは雲のようなものだ。つまらん雲があるために太陽が見えない。雲が消えてゆけば太陽が見えるようになる。師匠<sup>グル</sup>の恩寵で、我<sup>が</sup>の念<sup>おも</sup>いがなくなれば、そうすれば神



様が見える。

神の化身ラーマから、わずか二キュービット半(古代の尺度、約1.5m)しか離れていなかったのに、間にシーター(ラーマの妻という形をしたマヤーの幕があったから、ラクシユマナ(ラーマの弟)という形をした生き物は、その神ラーマを見ることができなかつた。ホラ、こうやってわたしの顔の前にタオルをぶら下げると、もうわたしが見えないだろ。こんなにお前たちの近くにいるのにね。こんな具合に、神様は誰よりも皆の近くにいるのに、マヤー、つまり覆いのために見ることができないんだよ。衆生(いきもの)はサツチダーナンダ(実在、智慧、欲喜)宇宙の本体)そのもの。けれども、マヤーとか我執とかいうものがいろいろな添えもの(ウパーデー)(肩書きや等級)をこしらえてしまつて、自分たちの本性を忘れている。

添えもので、それぞれの様子が変わってくる。黒縁の上等な服を身に着けると、自然にニドウ氏の軽い小唄を口ずさむようになって、お次はカルタ遊び——。散歩のときにはステッキを持つようになる。貧弱な男でも長靴(フット)を履くと、とたん口笛を吹きはじめて、階段を上がるときはイギリス人みたいに跳ぶようにして上がる。人がペンを持つと早速ペンの持つ性質が表れて、自然に紙を広げてその上にサラサラと何か書き出す。

金というものも一つの立派な添えもの(ウパーデー)でね、金ができると人は変わってしまったて、もう元の人間ではなくなる。

ここに或るバラモンがよく出入りしていた。見たところ、たいそう礼儀正しくておとなしかった。しばらくして、わたしはコンナガルに行ったんだよ——フリダイといっしょにね。舟から降りて歩い

ていたら、そのバラモンがガンガーの堤に坐っているのに出合った。きつと川風にあたつて涼んでいたんだろう。わたしらを見てこう言った。『おや、タクール！ 調子はどうですか？』その言いっ振りを聞いて、わたしはフリダイにこう言ったものさ。『ほら、フリダイ！ あの人は金ができたんだよ。だから、あんな言い方をするんだ』フリダイは吹き出したよ。

一匹のカエルが一ルビー持っていた。自分の巢穴の中に、そのお金は置いてあった。象がその穴をまたいで行つた。カエルは怒つて穴から飛び出し、象を蹴飛ばしてこう言った。『きさま、よくもこのオレさまをまたいでいったな！』金についた我執高慢は、これほどのものだ』

〔第七住地——我執はいつ消える——ブラフマン智の様相〕

「智慧が身についたら我執はなくなる。智慧が身につけば三昧に入れる。三昧に入ればそこで、我は消え去る。その智慧を身につけることが、とてつもなく難しいのだ。

ヴェーダにこうある。第七住地に心のほれば三昧に入るべし。三昧に入れば、やつと我を追い払うことができる。心が平常いつも住んでいるのはどこだと思ふ？ はじめの三つの場所だ——性器と肛門と臍。この三つの住地に住んでいる間は、心はただもう俗世のことばかりに執着している——女と金にね。心臓に心がのぼつて住むようになると、その人には神の光が見える。その人は光を見て、何だろう？ これは何だろう？と口走る。その次が喉だ。ここに心が住むようになると、ただ唯、神様のことだけを話したり聞いたりしたくなる。額——眉と眉の間だが、ここに心が上ると、サッチ

ダーナンダ(サフト、チャフト、アインシュタイン)「実在、智慧、歡喜」宇宙の本体すの様相が見えて、そのすがたに抱きついて直じかに感じてみたいと思う。だが、できない。ランタンの中の灯は、見えても直じかに触れることはできない。いかに触っているように感じるけれども、実際は触れないのだ。第七の住地に上のぼったときは、もう我アヘンカーラは消えてなくなり、三昧に入るのだ」

ヴィジヤイ「そこに到達してブラフマン智が生じたならば、人は何を見るのでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「第七住地に心がとどいたら何が起るか、口では言えない。船が黒い水域に入ったら、二度と戻ってこない。船の消息もわからない。海の様子も船から報告してもらえない。

塩人形が海の深さを測りに行った。だが入っていくほどにたちまち溶けてしまった！ 海の深さを誰が報告してくれる？ 知らせるべきものと一つになってしまったのだ。第七住地では心が滅び去って、三昧に入るのだ。どんな感じだか、口で言えるはずがない」

「しかし我我はなくならぬ——悪い私私と召使いの私私」

「俗世にはまり込んで女と金に夢中になっている私私は、悪いやつだ。個靈たましいと真我アトマンとが別れるのは、この私私が間にあるからだ。水の上に棒を一本投げこむと、二つの部分に分かれて見える。実際は一つの水なんだ。棒があるために二つに見えているだけだ。

我我こそがこの棒なんだよ。棒を取ってしまえ。一つの水があるきりだ。

悪い私私はどんな私私だと思ふ？ この私私を知らんのか？ こんなに金も持っているし、私より偉い

人間がいるかね？——と言う。私だ。泥棒が十ルピーでも盗もうものなら、先ず金を取り返して、それから存分にぶん殴る。それでも逃がしてやらす、警察にとどけてお巡りに引き渡し牢屋に入れて、悪い私シはこう言うんだ。あろうことか、この私から十ルピーも盗んでいくとは——身の程知らずめ！

ヴィジャイ「もし我を無くさなければ、世間への執着もなくならず、三昧にも入れないということであれば、ではやはり、ブラフマン智を求める修行をした方がいいと思います。そうすれば三昧に入れるわけですから。つまり、信仰バクティ・ヨーガの道では我が無くならないとしたら、智慧ジニャヤ・ヨーガの道の方がいいということでしょう」

聖ラーマクリシュナ「そりゃあ、たしかに一人か二人は三昧に入つて、我アハムがなくなるよ。だが、大部分の人はそこまでいかないんだ。千遍捨てようと決心しても、我アハムはクルリと戻ってくる。今日、アスワッタの樹を切つても、明日は又、新芽を吹き出す。どうせ、私アハムがなくならずに残っているなら、この仕様のない奴を、召使いの私アハムにしてしまえ。もしもし、神様、あんたは御主人、私は召使アハムという具合にしておけ。私アハムは召使アハム、私は神様の信者アハムという形の私アハムには害はない。甘いものを食べると胃の中で酸になるが、氷砂糖だけは甘いものの仲間じゃない。

智慧ジニャヤのヨーガというのは、極端に難しいんだよ。肉体が自分だ、という感じがすっかり消えなければ智慧は得られない。今は末世カリユガで、食物を摂トらなければ生命が保てないから、自分はこの肉体だという感じ——我アハムの感じがどうしても消えないのだ。だから、末世カリユガには信仰バクティのヨーガだ。信仰の道は

楽な道だ。心の底からあの御方を慕って称名をしる。讃歌をうたえ。祈れ。至聖大靈がつかめるよ、何の疑いもないことだ。

水の上に竹の棒を置くんじゃなくて、その棒でただ、表面に線を引いたとしよう。すると、二つの別な水があるように見える。だが、その線はすぐ消える。召使いの私や信者の私や子供の私はこちらよ、この水に引いた私の線にすぎない」

信仰のヨーガは現代の宗教、智慧のヨーガは極めて困難

—— 召使いの私、信者の私、子供の私

至上者の非人格的な相 即ち非顕現の真理に

心をよせる者たちの進歩は甚だ困難である

肉体をもつ者たちにとつて

その道は常に險しく様々な困難を伴う

—— ギーター 12 — 5 ——

ヴィジャイ「聖ラーマクリシュナに向かつて」先生！ あなた様は、悪い私は捨てろとおっしゃいますが、では、召使いの私には、何の害もないのですか？」

聖ラーマクリシュナ「そうだ。召使いの私、つまり、私は神様の召使い、私はあの御方の信者だ」

という誇り。これには害がないどころか、これで神様がつかめるんだよ」

ヴィジャイ「では、召使いの私<sup>レ</sup>が持っている色欲や怒りは、どう解釈したらいいのですか？」

聖ラーマクリシュナ「その思い（召使いの私<sup>レ</sup>が本物なら、それは見せかけの色欲や怒りというもの——。もし神様をつかんだ後で、召使いの私<sup>レ</sup>か、信者の私<sup>レ</sup>がある場合は、その人は誰をも傷つけることはできない。賢者の石に触れると剣は黄金になってしまうから——。剣の形はしているが、誰をも斬ったり傷つけたりしない。

椰子の樹の枝が枯れ落ちると、幹に痕<sup>あと</sup>だけが残っている。その印で、以前この場所に椰子の枝があったのだということがわかる。それと同じことで、神をつかんだ人にも我執の跡だけはあるから、愛欲や怒りのように見えるものが残っているのだ。子供みたくない様子になってね。子供はサットヴァ、ラジャス、タマスのどの性質<sup>グナ</sup>の支配も受けない。子供はものに興味を持つのも早い、離すのも早い。うまいこと言って、半パイスの人形で五ルピーの服をだまし取ることもできる。はじめのうちは、イヤだ、やらない。パパが買ってくれたんだから<sup>レ</sup>なんて、断乎<sup>だんこ</sup>とした態度で言うかも知れないがね。それに、子供にとつては、人間はみな同じことだ——あの人はエライとか、この人はつまらん人だとか、そんな感じは持っていない。カーストの区別もない。母親が、この人はおまえのお兄さんだよ<sup>レ</sup>と言って聞かせれば、大工のような低いカーストの人とでも平気でいっしょに坐って同じ皿から飯を食う。子供には憎しみもないし、浄、不浄の区別も感じない。用を足しに行っても、手も洗わない。人によつては三昧に入った後でも、召使いの私<sup>レ</sup>や、信者の私<sup>レ</sup>を持ち続けている。私<sup>レ</sup>は召使い、

あなたは御主人、私は信者、あなたは至聖の御方——こういう誇りが信仰者にはあるのだ。神様をつかんだ後でも、私というものはすっかりなくなれないのだ。それに又、こういう誇りをひっきりなしに思い起こすことによつて、神様をつかむことができるのだ。これが信仰のヨーガだ。

信仰の道を進んでいけば、ブラフマン智に達する。至聖全能のあの御方がその気になれば、ブラフマン智を授けて下さる。だが信仰者たちは大体において、ブラフマン智を希<sup>のぞ</sup>んでいない。私は召使い、あなたは御主人、私は子供、あなたは母親、こういう誇りを持ち続けていたいのだ」

ヴェイジャイ「ヴェエーダーンタの教えに従っている人たちも、やはり神を覚えることができるのでしようか？」

聖ラーマクリシュナ「うん。分別の道でもあの御方を覚えることができる。それを智慧のヨーガというのだ。だが、分別の道はたいそう難しい。お前に、そら、心の七つの住地の話をしただろう。七番目の住地に心が到着したら三昧に入るのだ。ブラフマンは眞実、この世界は虚仮——このことが心の底からはつきりわかつたら三昧に入るのだ。けれどもね、いまは末世で、生きているものはすべて食べ物なしには肉体が保てないのだから、そうした人間がブラフマンだけ眞実、この世界は空虚<sup>むなしい</sup>なんて、どうして感じられる？ 肉体感覚がなくなる限り、それは出来ない。私はこの肉体ではない、私は心でもない、二十四の存在原理でもない、私は幸福と不幸を超越したもの。私にとつて、病氣、悲しみ、老いること、死ぬことなど何の関係もない——こういう感覚を持ち続けているのは難しいことだよ。どんなに識別し尽くしても、体が自分だ」という意識がどこからともなく戻ってくる。ア

スワッタの樹を伐り倒して根まで枯れたと思つても、翌朝見ると、切り株から新芽が吹き出してくる。人は、自分がこの体だ、という意識から逃れることはできない。だから、信仰のヨーガが末世の人間には良いんだよ、楽なもの。

それにわたしなら、砂糖になりたいとは思わないよ、砂糖を舐めて楽しむのが大好きなんだ。私はブラフマンだ、なんて、一度だつて言いたいと思つたことはない。わたしは、あんたは至尊さま、わたしはあんたの召使いと言つてゐる。第五住地と第六住地の間で行つたり来たり、ポート遊びをしているのがいいね。第六住地を超えて、第七住地に長居したいとは思わないね。あの御方の名を称えたり讃歌をうたつたりしているのが、わたしの希望なんだ。主人と召使いの関係でゐるのは、とてもいいことだ。そら、ガンジス河のさざ波とは言つても、波のガンジス河とは誰も言わないだろう。私こそ、それ（梵）である——こういう増上慢はよくない。肉体我の意識があるのに、こんなふうに思ひ上がつてゐると、しまいにはロクなことにならない。向上できるどころか、だんだん墮ちていく。他人を騙し、自分をも騙すことだ。自分のことがよくわかつていないのだ」

〔信仰の二つの型——最上の持ち主——見神の方法〕

「とは言つても、信仰ならどんな信仰でも神様を得られるわけではないよ。愛の信仰でなけりや神様はつかめない。愛の信仰は情熱的信仰とも言う。愛と情熱がなけりや、至聖の御方はつかめない。神様が何より大好きにならなければ、あの御方をつかまえることはできない。



もう一つ別な信仰の型がある。その名は規則的信仰ヴァイデイ・パクラウ。これこれの回数だけ称名すべし、断食すべし、聖地巡礼すべし、これこれの供物を捧げて礼拝すべし、犠牲いけにえの動物を何頭差し出すべし。こういうのを引つくるめて規則的信仰ヴァイデイ・パクラウという。こういう行事を長い間積み重ねているうちに、だんだん情熱的信仰に進んでくる。情熱的信仰まで来なければ神様はつかめない。とにかく、あの御方が大好きにならなけりやね。世間並みの欲望を一切捨てて、心のすべてをあの御方に向ける。そうすればあの御方をつかめる。

けれども人によつては、はじめから情熱的信仰ラীগを持っている。生まれつきなのだ。子供のころからあるのだ。子供のころから神様を慕つて泣くんだよ。プラフラダのようにね。規則的信仰ヴァイデイとは、ちょうど風を入れるのにウチワをあおぐようなもので——風を起こすためにはウチワが必要だ。神様を好きになれるように称名したり、苦行したり、断食したりする。だが、南の風がそよそよ吹いてくると人はウチワを置く。自分から進んで神様に夢中になつて恋慕うようになれば、称名やその他の行事はしなくてもよくなる。ハリの愛に酔つてしまえば、規則的ヴァイデイな行事なんか誰がする？

神様が心しんから好きになれない間は、まだ未熟あおな信仰だ。あの御方が大好きになつた時、その信仰を成熟うれした信仰と呼ぶのだ。

信仰あが未熟あおい間は、神についての話も教えも、はつきり正しく理解することができない。成熟うれした信仰になれば、よくわかるようになる。写真のガラス板にインキ(硝酸銀のこと)が塗つてあれば、写つた像が焼き付けられる。けれど、ただのガラス板だけなら、何千の像が写つても一つも焼き付かない

——写ったものがなくなれば元のままのガラス板だ。神様に対する愛がなければ、教えを身につけることはできない」

ウィジャイ「先生、神をつかみ、神を見るには、信仰がありさえすれば十分なのでしようか？」

聖ラーマクリシュナ「そうだよ、信仰を通してこそあの御方が見える。ただし、成熟た信仰、愛の信仰、情熱の信仰だよ。こうした信仰があつて、あの御方への愛が深まる。子が母を愛し、母が子を愛し、妻が夫を愛するように——。

この愛、この情熱の信仰を持つと、妻や子、親類、友人に対する迷いの執着がなくなる。慈悲心があるだけ。この世界はよその国で、ちよつくら仕事をしに来ているだけだ、という感じになる。ほとんどの家屋敷は郷里にあるが、カルカッタで仕事をしている、というようなものさ。カルカッタで一時は暮らさなけりやならないよ——仕事があるんだから。神様が大好きになれば、この世への執着や世俗の浅ましい知恵などはすっかり消えるよ。

俗世の知恵才覚がほんの僅かでも残っているかぎり、神様にお目にかかることはできない。マツチが湿つていては、千遍こすつても火はつかない。マツチ棒を一山もムダにするばかりだ。俗世に執着した心は、湿つたマツチ棒だ。

シユリー・マティー(ラーター)が、「クリシュナが見える」とおっしゃったとき、友だちはこう言った。『私たちには誰も見えませんよ。あなたは気がおかしくなったんじゃないの?』シユリー・マティー(ラーター)はお答えになった。『ねえ、みんな! 熱愛という目薬を目に差してごらん、あの御方がちゃ

んと見えるから——」ヴィジャイ、それ、お前たちのブラフマ協会にこんな歌があるね——

燃ゆるがごとき愛なくては

灯明をあげ犠牲を供えても

主にまみゆることはなし

この燃える情熱、この愛情、この成熟うきつた信仰、この愛が生まれたなら、そうすれば有形の神にも無形の神にも、両方に会えるんだよ！」

〔見神は神の恵みを受けなくては経験できない〕

ヴィジャイ「見神は、どうすれば経験できるのでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「心が清く純粹でなければそれはできない。女と金で心が汚れきつて、いわば、心が泥まみれになっているのだ。針だって泥まみれになっていけば、磁石の方に引かれていかない。泥をきれいに拭いてやれば磁石に引かれる。心の泥は涙で洗われる。ああ神様、もう二度とこんなことは致しません」と言つて後悔の涙を流せば、泥はきれいに流れおちる。すると神である磁石は、心の針を引っばつて下さる。それから三昧に入つて見神できる。

だが、何千遍試してみても、神様のお恵みがないかぎりはどうにもならない。あの御方のお恵みが

なければ、あの御方には会えないよ。お恵みは簡単にいただけると思うかい？ 我執高慢をすっかり捨てなけりゃならんのだ。私が行動しているんだと感<sup>じ</sup>ている間は、見神はできないよ。貯蔵室に誰か一人入っているとき、その家の主人に、ある人が、『旦那様、あの蔵へ行つて品物を出して下さいまし——』と頼んだとする。主人は、『今、蔵に人が入っているから、私が行くことはないよ！』と答える。自分が主人になりすましている人間の心のなかには、神様はなかなかお入りにならない。

お恵みがあればこそ会えるのだ。あの御方は智慧の太陽だ。その光線の一筋が、この世界に智慧の光となつて差し込んでいるから、それでわたし達は互いに知り合うことができるし、この世界でこんなに様々な知識を学んでいるんだよ！ あの御方の光が、あの御方自身のお顔に向けられたとき、そのときこそ見る事ができる。西洋人の警官が、夜分にランタンを持って持ち場を廻つてるとき、誰もその人の顔を見ることはできない。けれど、その人はその光で皆の顔が見られるし、皆も互いに互いの顔が見られる。

もし誰かが、その警官の顔を見たいと思つたら、こう言つてお願いしなけりゃならんだろう——『旦那さん、どうか光を自分のお顔に向けて下さい。あなたを一目見たいから』

神様にこう言つてお願いしなさい。『タクル、どうぞ智慧の光を、あなた自身に向けて下さい。私があなただを見られるように！』と。

家のなかに灯火あかりが点ついていないのは、その家がひどく貧乏な証拠だ。だから、お前の心に智慧の光を灯せ。

智慧のランプを部屋に灯して 梵の女神のお顔を見よや」

ヴィジヤイは薬を持ってきていた。ここで服用するつもりである。それには水が要るので、タクルは水を持ってこさせた。タクルは無条件の恵みの海である。ヴィジヤイが車代や船賃を持ってこられなかったので、タクルは度々々々人を使いに出しておられたが、こんどはバララームのところこそ旨を言いにおやりになったらしい。バララームが乗物代を出してくれるにちがいない。やがて、バララームといっしょにヴィジヤイが戻ってきた。夕方、ヴィジヤイ、ナヴァ・クマール、およびヴィジヤイの友人達はバララームの舟に乗った。バララームは彼等をバグバザールのガートまで乗せていってくれるのだらう。校長もその舟に乗りこんだ。

舟はバグバザールのアンナプルナ沐浴場に到着した。バグバザールにあるバララームの邸のそばに彼等が着いたとき、ちょうど月光が差し始めた。今日は自分の四日目、冬でやや寒かった。タクル、聖ラーマクリシュナの蜜のようにあまくやさしい教えを絶えず思い出し、その喜びに満ちた姿を胸に思い浮かべながら、ヴィジヤイ、バララーム、校長、その他の人びとは家路だったのであった。